

論文の和文要旨

論文題目

無生物3格二重目的語構文

— 「生物3格」を含む二重目的語構文と対比しつつ—

氏名

伊藤（時田）伊津子

1 研究対象, 目的

本研究の分析対象は、ドイツ語の、生物ではなく、事物を表す3格(以下「無生物3格」と呼ぶ)を含む二重目的語構文である。

研究目的は、これまでの二重目的語構文に関する研究成果をふまえ、「無生物3格」のみと共起する二重目的語構文(以下、「無生物3格二重目的語構文」と呼ぶ)の持つ形態的・情動的・統語的特性を、コーパス分析の一つの方法論的モデルとして、主に頻度の観点から調査・分析し、これらの諸特性が動詞の意味タイプ、より詳しく言えば、文意味タイプに基づくことを示すことである。さらに言えば、このことにより、「無生物3格二重目的語構文」の全体像を明らかにすることを目的とする。

「二重目的語構文」とは、例文(1)や(2)のように、3格目的語と4格目的語を共に含む他動詞構文を指す。また、例文(1)の *seiner Freundin* 「ガールフレンド」のような3格を「生物3格」と呼び、例文(2)の *der Suppe* 「スープ」や *der Gefahr* 「危険」のような3格を「無生物3格」と呼ぶ。

- (1) Er schenkt *seiner Freundin* einen Ring.
彼はガールフレンドに指輪を送る
- (2) a. Sie fügte *der Suppe* etwas Salz bei.
彼女はスープに少しの塩を加えた
- b. Er setzt seinen Freund *der Gefahr* aus.
彼は友人を危険にさらす

本研究が「無生物3格」という点に焦点を合わせて、二重目的語構文を調査・分析するのは、生物、無生物という意味特性が二重目的語構文の特性とある種の関連性を持つと指摘されながらも、従来の研究は「生物3格」の事例を主な対象にし、「無生物3格」は例外として扱われるに過ぎなかったため、あるいは「生物3格」と「無生物3格」の事例を明確に区別しないまま行われてきたためである。

2 方法論

本研究における方法論の第一の特徴は、「無生物3格二重目的語構文」について、数少ない典型的な事例から(後に触れる「構造格」「内在格」などという)目に見えない抽象構造を理論的に規定しようとするのではなく、すなわち、理論的な分析に重点に置くのではなく、明確な手順に従い、この構文が持つ動詞を(理論的には)網羅的に収集し、実証的に調査・分析するということである。

第二の特徴は、コーパスを用いて、「無生物3格二重目的語構文」の実際上の言語使用データを幅広く収集し、具体的な事例を個別的に調査・分析することである。従来、3格の研究は、サンプル的に事例を収集し、そこから帰納的に規則体系(理論的構築物)を抽出するという方法が多くとられてきた。しかし、現在はIT技術の進歩により、電子コーパスを利用し、大量のデータを収集・調査そして分析することが可能になった。本研究では、電子コーパスを利用して典型的な事例のみならず、周辺的な事例をも収集し、共起する名詞なども含め、具体的かつ個別的に考察する。

第三の特徴は、電子コーパスを利用して、問題になる現象の使用頻度を調査・分析することである。本研究では、「無生物3格二重目的語構文」を対象に、3格と4格の代名詞化、定性(指示物が特定のものか否か)、中域語順などの特性に関する頻度調査を行い、動詞ごとの、これらの特性における頻度的傾向を調査・分析する。

言語研究にとって、具体的な言語現象の背後にある規則体系の抽出が重要な課題であることには変わりはないが、もう一つの、言語研究の重要な課題は、実際の言語使用の実態を把握することである。言語使用では、ある言語形式が使用されるか否かではなく、それがどのような頻度で使用されるかが重要な問題になる。

なお、本研究の目的に必要なデータが、電子コーパスからすべて十分な形で収集できるわけではない。このような場合には、補完的な方法として、インフォーマントテストを行い、必要なデータを収集した。

3 本論文の構成と各章のまとめ

第2章では、二重目的語構文に関するものに限定し、先行研究の成果、知見などをまとめる。第1節で「有生性(Belebtheit)」に関する研究を、第2節で「人称代名詞化」、「定性」に関する研究を、第3節で、「3格と4格の中域語順」に関する研究を、第4節で、「動詞との構造的関係」に関する研究をまとめる。

先行研究を概観し、以下の点を確認した。

- ①《有生性 (Belebtheit)》二重目的語構文の3格は典型的な用法としては生物を表す。しかし、「無生物3格」の事例も決して少なくはない。
- ②《定性》「生物3格」は人称代名詞、定の要素として実現する傾向にある。しかし、「無生物3格」については、特徴が明らかにされていない。
- ③《語順》「生物3格」の場合、「3格-4格」語順が基本的もしくは無標であるとされる一方、「無生物3格」の事例に関しては、まだ十分な研究がなされていない。
- ④《動詞との構造的関係》二重目的語構文の3格に、「無生物3格」の事例を考慮して、構造格(結び付きの弱いもの)と語彙格(結び付きの強いもの)の2種類が想定されている。

第3章では、実際のテキストを取り上げ、二重目的語構文における「無生物3格」の使用頻度を調査し、その結果を示す。目的は、二重目的語構文における「無生物3格」は例外的な用法なのか、また実際はどの程度の割合で用いられているのかに関して、一定の結論を出すためであり、結論として、「生物3格」と「無生物3格」の頻度が異なることを示し、「無生物3格」が一定の頻度で使用されていることを統計的に示した。

第4章では、「無生物3格二重目的語構文」に関する事例をコーパスから収集し、調査・分析した結果を示す。第1節では、「無生物3格」を含む二重目的語構文の事例をどのように収集したかについて述べる。

第2節では、これらの事例を、どのような視点から調査・分析するかを述べる。主なポイントは(A)人称代名詞化(名詞で表すか人称代名詞で表すか)、(B)定性(定の要素を表すのか、不定の要素を表すのか)、(C)中域語順(「3格-4格」語順になるか、「4格-3格」語順になるか)、(D)動詞との構造的関係(3格と4格のどちらが動詞と構造的に近い関係にあるか)である。

人称代名詞化に関する調査・分析の目的は、3格と4格(受動1格)が、人称代名詞化に関してどのような傾向を示すかを明らかにすることである。定性に関する調査・分析の目的は、3格と4格(受動1格)が、定性に関してどのような傾向を示すかを明らかにすることである。中域語順に関する調査・分析の目的は、当該の動詞において、どのような語順が、頻度から見て「基本的な」語順であるかを明らかにすることである。動詞との構造的関係に関する調査・分析の目的は、それぞれの動詞において、3格および4格(受動1格)と動詞との構造的関係を明らかにし、3格と4格(受動1格)の中域語順との関連性を明らかにすることである。

第3節では、前節で述べた分析の視点に基づいて行った分析結果を、動詞ごとに示す。また、一部インフォーマントテストの結果も示す。そして、最後の第4節では、人称代名詞化、定性、語順におけるそれぞれの傾向を、動詞を通して眺め、これらの特性と動詞の意味、より正確に言えば、動詞の意味タイプ(詳しく言えば、文意味タイプ)との関係を分

析した結果を示す。

結論としては、類似した傾向を示す動詞群は4つの意味タイプに分類できる。

「追加関係」の動詞 *abgewinnen*, *anfügen*, *beifügen*, *beimengen*, *beimessen*, *beimischen* は、3格の表す対象に4格の表す対象をその一部として「追加」という文意味を形成し、以下のような特性を示す。

- ①〔代名詞化〕3格も4格も、人称代名詞ではなく、名詞によって表される頻度が高い。
- ②〔定性〕3格の場合、定の要素の頻度が、4格の場合、不定の要素頻度が高い。
- ③〔中域語順〕基本語順は、「3格－4格」語順である。

「対比関係」の動詞 *gegenüberstellen*, *voranstellen*, *entgegensetzen* は、3格の表す対象に4格の表す対象を「対比」という文意味を形成し、以下のような特性を示す。

- ①〔代名詞化〕3格も4格も、人称代名詞ではなく、名詞によって表される頻度が高い。
- ②〔定性〕3格の場合、定の要素の頻度が高く、4格の場合、定の要素、不定の要素の頻度はほぼ半数ずつである。

③〔中域語順〕基本語順は、「追加関係」の場合ほど明確ではないが、「3格－4格」語順である。

「所属関係」の動詞 *angliedern*, *zuordnen*, *zurechnen* は、4格の表す対象を3格の表す対象に「所属」させるという文意味を形成し、以下のような特性を示す。

- ①〔代名詞化〕3格も4格も人称代名詞ではなく、名詞である頻度が高い。
- ②〔定性〕3格も4格も定の要素の頻度が高い。
- ③〔中域語順〕基本語順は、「支配下関係」の場合ほど明確ではないが、「4格－3格」語順である。

「支配下関係」の動詞 *ausliefern*, *aussetzen*, *entringen*, *überlassen*, *unterwerfen*, *unterziehen*, *verschließen*, *verschreiben* は、4格の表す対象を3格の表す対象の「支配下」に置くという文意味を形成し、以下のような特性を示す。

- ①〔代名詞化〕3格も4格も人称代名詞ではなく、名詞である頻度が高い。
- ②〔定性〕3格も4格も定の要素の頻度が高いが、特に4格における再帰代名詞の頻度が高い。
- ③〔中域語順〕基本語順は、「4格－3格」語順である。

第5章では、本研究での「無生物3格二重目的語構文」の調査・分析をまとめた後、本研究での方法論的特徴を述べ、最後に、二重目的語構文の全体像を明らかにするという目的のために残された今後の具体的な研究課題、具体的には、「生物3格」と「無生物3格」が競合する二重目的語構文および「生物3格」のみが現れる二重目的語構文の、本研究での方法論を用いた分析について述べる。